

5月9日に牧山社務所から携帯で送ったメールは東京在住の次男から彼の友人のホームページ会社へ転送され高橋徳治商店のHPに載せられた。

9週目震災から63日で牧山を降りた。残る人たちは20人、家がない家があっても耐震上住めない、余震倒壊の危険を冒しても住んでいる人は電気水道も当然ガスもない、ろうそくで暮らしている。瓦礫も壊れた車も目の前にあり冠水で満潮時には国道さえ通れない、ましてや縦横に走る道路は一切砂利も敷くことさえない。行政は「地元の土木建設業者の保護のため、労働者の保護のために他地域や他県からの業者は瓦礫撤去には入れていません」とぬかした。市長は行方不明者を捜索するため瓦礫撤去が進まないとぬかした。行方不明者をたてに取った答弁。歩かない市長、車です〜っとホコリを立てて走り去る行政マンたち。確かにほぼ20日前にわが社の近くで10数遺体が見つまっている。

1万数千棟必要なこの町で5月には数千棟しかできないと言われる仮設住宅を当てにせず、また何箇所も移動させられる気遣いが多い避難所暮らしより、余震が来ればかなり危ないが、家の二階がいいと多くの住民が帰宅する。前橋のボランティアさんをお願いして一級建築士と建築会社が来て13棟の家を診断していただいた。行政はそういう所に目を向けろ！・・・残念ながら我が家は赤紙。

避難所では一食から二食はヤマなんとかいうメーカーの菓子パンがコンビニ海苔おにぎりや交互に毎日続く。被災支援のそれを運ぶ宅急便は残して帰ると次は持って来れないと恐ろしい量の菓子パンや代わり映えないおにぎりを運んできた。被災者には捨てる人もいたというくらい菓子パンおにぎりは痛烈だった。これは国のお金か、義援金からか、実態を聞かない見ない行政。

贅沢だろうか？ 今は一食は炊き出しが出てきていた。

水も食事も配給に並ぶ、お年寄りが買い物の自転車に大きなペットボトル数本積んで引いてでこぼこ道や冠水した道を通り家に帰る、乾燥時にはヘドロが粉塵となって町を覆いマスクをしても鼻や喉を刺激する。遅い始業式で学校が始まり子供たちの昼食はパンと恐らくロングライフの牛乳。生活クラブ生協岩手が生産者と組んで学校給食にと一部に缶詰などを配ったそうだが。

川の底や色んな工場や下水配管から流れてきたヘドロには危険な何かが入っているだろうに検査さえしない。水道が通った所では下痢などが流行っているとも聞く、薄汚れた川の水でヘドロが流れ込み石油系の油類や重金属、夥しい菌なども心配な浄水場でどこまで除去可能か誰も責任がない。因みにわが社の川口町には電気も水道さえまだ来ていない。30日は大風大雨で折れた電信柱がゆらゆら電線で支えられていた。冠水でトラックが立ち往生、私の車はブレーキに水が入りマフラーに水が入るぎりぎり危なかった。まだ満潮前なのに。

石巻市は被災地の中で一番、死者・行方不明者が多い町だ、申し訳ないが行方不明者が生きている望みがないので亡くなった人に数えれば5000人を超える、16万人の市で広範囲だからとか言っているが。北の岩手県から各被災地を回ってきた人に聞けばどう見ても一番復旧が進んでいないらしい。

今日で5月も終わる…

私たちの地域は瓦礫も倒壊した家も陥没も車も橋さえもまだまだ見かける、これでも瓦礫は90%は無くなったのだが。

行政は歩かない、トップも歩こうとしない。一步川を越えれば風景が変わり長靴姿さえ見られない、先週初めて行った仙台の市街地は普通の生活で当たり前だが庁舎ではマスクさえしていない。3.11前の日常に帰れば心に傷を負った人も癒される、私たちはそうやって日常で非日常を消してきた。夜は三陸道も工事だらけで22時近くに石巻に入った、とにかく暗い、街灯や街の灯がどんどん減っていくのだ、ヘッドライトに現れては消える壊れた橋や家々が悲しい、怖いくらいだ。でこぼこ道路が始まるとヘドロの臭いがしてくる、停車すればヘッドライトに風もないが霧状のヘドロ粉塵が舞っている……風景が変わる一瞬。地獄絵がそこに現れる

わが社では800坪からまた多くの機械から恐らく40トンは出てきたろう、生活クラブ岩手職員や理事やその家族を始め神戸から青森まで各単協の職員、連合会職員、常総生協を中心とした21ネットや生産者グループ、関西よつば連絡会の面々、大石田百姓保存会を中心とした面々、泊まる場所がないので一日だけ応援してくれた生協職員などなど延べ200人ではきかない人たちが休みも関係なくヘドロにまみれてきつい労働をしていただいた。今でもまだ日々3~5名が来ている。だれが好き好んでこんなことをするだろう、申し訳なきで一杯だ。私たちは被災者です、しかしラジオと最近配達をお願いした新聞しかない私は震災のことを語っている時間がドンドン無くなっていることに違和感を感じている。

「被災者、ひさいしゃ」って何だろうか。

東北で一番の河川、北上川は岩手県の北から宮城県を通過して石巻で海に出る、ヘドロは何十年何百年もの時間で二つの県の支流域から流れてきた工場、農畜産や住民の生活の垢だ。下流ではそれを飲んでいて。そして震災はそれらを町中にばら撒き、夥しい時に忘れていた思い出にたっぷり降りかかって積もっているヘドロを私たちは、手やスコップでかき出した、一日何百回もの作業。背中まで突き刺さっている硬すぎる痛みを布団代わりに座布団に載せ、風呂も入れず痛くて寒くて眠れない夜が続いた。

有機物、砂、危険物も入っているだろう、その臭いは容赦なく髪まで、汚れは爪の間に入り込む。責任は誰だ？責任者がいなくても目の前に都市のヘドロがある、ヘドロにまみれた家財や家や畳や道路や車がある。責任者出て来い！！確かに私たち下流の海辺の人間も、自然を汚し壊し上中流の人が作った作物や畜産物や乳製品を食べ農薬や化学肥料や抗生物質や有機溶剤や工場排水を容認し機械や自動車や便利なものを使ってきた、家庭でも合成洗剤や化学薬品を使い食も衣料も財も使い捨てる消費をしてきました。

抗生物質や環境ホルモン物質も合成添加物も遺伝子組み換えも容認し、CO<sub>2</sub>も排出し電化生活として原発も結果として容認してきました。

責任者～早く出て来い！！

被災した水産関係者の代表が立ち上げ毎週開いている水産復興会議も来週で10回を迎える、800～900億円も地域で貢献している水産界の会議に市長が出てきたのは初めだけ、トップの参加は100人を超えているのに産業部長も出てこない、副知事が来たが5分一方的に話して帰って行った、せめて1時間会議の切実な話を聞く時間もないのか、後ろのほうにいた私には拍手する人がまばらな数しかいなかったのがよく見えた。6回目で水産物のサンプルを漁獲して9回目に県からの報告があった、早口で

「カレイや・・・など調べましたが放射能は問題なしで今後とも継続して調査いたします」

どういった海域で深さは、魚種の部位は、ヨウ素、セシウム、ストロンチウム、果てはプルトニウムは？ 海水は海底の泥は？

・・・重油や重金属やPCBは？・・・毎回質問して疲れ果てた。水揚げすることばかり考えている人にはもう私の質問はどうでもいいのだろう。ヘドロのホコリが舞う仮設の魚市場には病原菌もウミネコの糞のサルモネアも土壌菌も耐熱性菌も危険物質も入っている可能性があるにも関わらずだ。

岩手県宮古、宮城県塩釜、気仙沼の水揚げ開始や開始間近の報道に焦りを感じているのだろうか。

豊橋から来た量販店の社長は千葉県産と言うだけで魚介類の買い手がない、可哀相だ！と、千葉県の仲卸は価格がかなり買い叩かれ逆ザヤになると嘆き、同じ千葉県の量販店ではカツオ刺身が山積みになって30%引きで販売されていたと。これを「フウヒョウヒガイ」と呼ばずして何だろう、しかも販売している側には風評被害を儲けのチャンスにしないで「安全かそうでないかを食べる側に知らせる義務と食べる側にはそれを知る権利がある」ことを肝に銘じるべきだ。マスコミは、ご祝儀相場の金額を地元新聞の一面に上げ買受人の顔写真とコメントを載せている。復興に向けて・・・復興などしていない、希望なんてどこにもない、現実を隠すだけのまやかし報道も過酷な現実には疲れた人には必要なのかも知れないが。

しかし現物は人の口に入る、魚店で皮をひき内臓を捨て骨も取るから家庭で食べる部分は問題ないとでも考えているのだろうか。

少なくとも私は、まき網船、一本釣り、定置網、近海沖合いに関わらず残留放射性物質を検査してから加工など考えるのが、生産者としての義務だと考えるし食べる側はしっかりそのことやその選択の「重さ」を考えて欲しい。

鮮魚や冷凍魚やその加工食品の生産者の苦痛を知って欲しい、まじめに情報開示するほど自分の首を絞めることになる可能性が高くなるのだから、しかも長い長い重い決断だから。

「紙一重」という言葉がある。3.11 は私たちに何をもたらしたのだろうか。ショックならどんなショックか、生き残った、或いは生き残された、生き残れた、生かされた私たちしかそのショックを語れない。「求道すでに道あり」と宮沢賢治の言葉を引用して詩人が「瓦礫の中に道がある」と詠み地元の新聞に載っていた。しかし それは余程、冷徹な頭でないと語れない言葉だ。

社員の中には父親や連れ合い、親族をなくした者がいる、まだ見つからない人もいる。ある社長が震災時東京にいたから立ち直りが早かった、3日目で戻ったら社長たちは皆同じように呆然として飯を食べ眠りの生活をしていたと。人により感じ方も様々だが、まともに受けた人ほど立ち直れない。

全ての従業員を支えるには年間 1 億数千万円  
会社には収入がない  
胃の上が深く痛む夜中の二時  
明け方救急車で搬送された  
どんなに悩んでも従業員を前に話す言葉は「全員解雇」  
頭を下げて頭を上げた時来社してきたスタッフは  
みんな頭を下げたまま放心していた

5月のある時  
夜中に眠りかけて起きた。  
前を見ようと誰かが叫んでいた。

2011年5月31日